

# 大安寺・南大門跡から出土した天平の仏像

史跡大安寺旧境内 奈良市大安寺二丁目

史跡大安寺旧境内南大門地区の保存整備事業に関わる発掘調査で、塑像（仏像）が破片で30点あまり出土しました。すべて南大門の北階段を覆う堆積土から出土しました。

塑像はすべてが火災等で焼けていましたが、製作技法や形態的な特徴を観察できるものが3点ありました。現存する奈良時代の塑像と比較したところ、共通する点が多いことなどから、奈良時代に作られたものと判断しました。

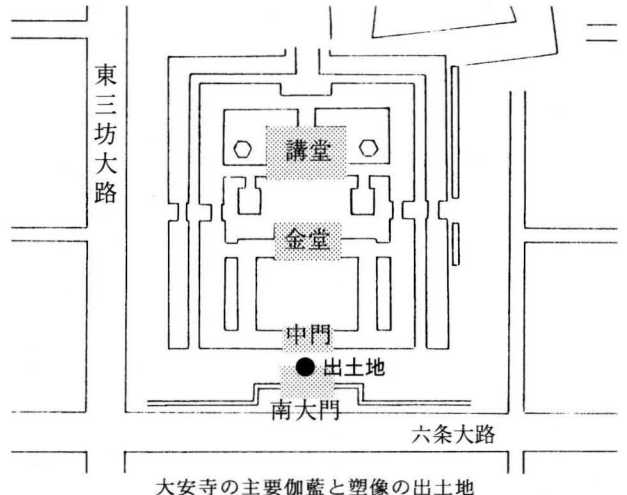
**記録に残っていた大安寺の塑像** 大安寺には、大安寺の縁起と財産目録をまとめた『大安寺がらんえんぎならびにるまじざいちょう』（以下、『資財帳』）が残っています。これは、天平19年（747）に収録したもので、以下のような記載があります。

「 堀 四天王像二具在南中門  
右天平十四年歳次壬午寺奉造 」

「堀（しょう）」とは塑像を指し、天平14年（742）に製作された塑造の四天王像二具（2組）が、「南中門」に安置されていたという内容です。大安寺に現存する塑像はありませんので、当時の大安寺に所在した塑像について知ることのできる貴重な記録です。

それでは、「南中門」とはどの門を指すのでしょうか。『資財帳』には「南中門」の他、「南大門」、「中門」と3つの門の名称が記されていますが、それぞれ門の位置に関する記載はありません。現在までに発掘調査で確認している門は、金堂の南にある門2つのみで、位置関係から南大門、中門にあてられています。このうちのいずれかが、『資財帳』に記されている「南中門」にあたるという説があります。

以上のことから、現在の南大門あるいは中門が当時の南中門であるならば、出土した塑像は、『資財帳』に記されている四天王像そのものではないでしょうか。

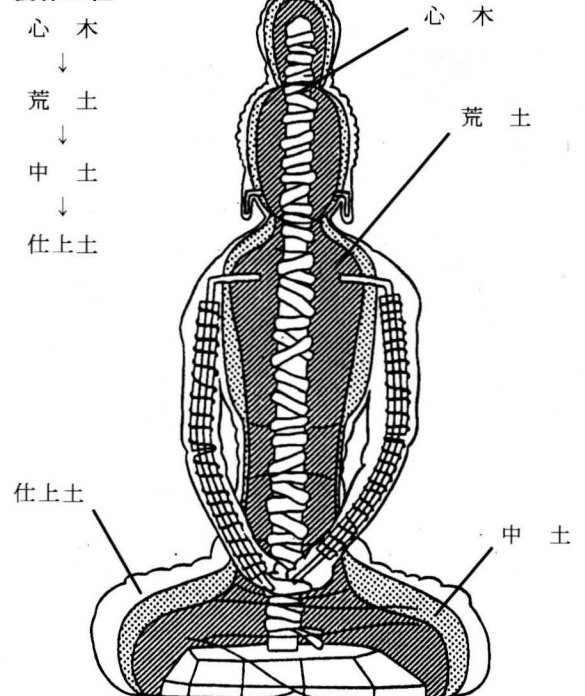


大安寺の主要伽藍と塑像の出土地

**塑像とは？** 粘土で作った像で、奈良時代に流行しました。その製作工程は、まず、木で「心木」を作り、心木に縄を巻き付けて、内から「荒土」、「中土」を順番に重ね、最後に「仕上土」で仕上げます。

材質で分類すると、仏像には、他に木像、乾漆像、銅像などがあります。

**製作工程**



塑像の断面と製作工程

（『日本の美術第255号 塑像』至文堂、1987より抜粋、改変）

**塑像A（四天王像の腕部）** 長辺約16cm、短辺約12cm、厚さ約5cm、重さ約760gあります。塑像の製作技法の特徴である荒土、中土、仕上土の3層が残っており、荒土にはスサと呼ばれるわら藁や直径1～5mm位の小石が大量に含まれています。中土には、荒土よりも細かいスサや小石が若干入っていますが、仕上土にはきめの細かい粘土を使っています。表面の緩やかなカーブや皺しわの表現から、衣服の一部と思われます。また、荒土の成形の仕方から、腕や足を意識して作られていることがわかります。

ところで、現存する奈良時代の四天王像は、甲冑かっちゅうをつけた武装の姿で足の下に邪鬼などを踏んでいます。甲冑の下には上衣じょういを着ており、肩から肘ひじまでは甲冑おおに覆われて下の上衣は見えません。しかし、上衣が露出している肘から手首にかけての様子は、塑像Aの表面の緩やかなカーブや皺の表現とよく似ており、塑像Aは四天王像の腕部と考えてよいと思われます。その大きさからみて等身大と想定できます。なお、如来像や菩薩像は、衲衣のうえや天衣てんねと呼ばれる衣をまとい、四天王像のように上衣を着ることはないようです。

**塑像B（邪鬼の頭部）** 破片2点が接合した個体で、長辺約17cm、短辺約8cm、厚さ約7cm、重さ約620gあります。仕上土と中土しか残っておらず、荒土は剥がれ落ちたようです。

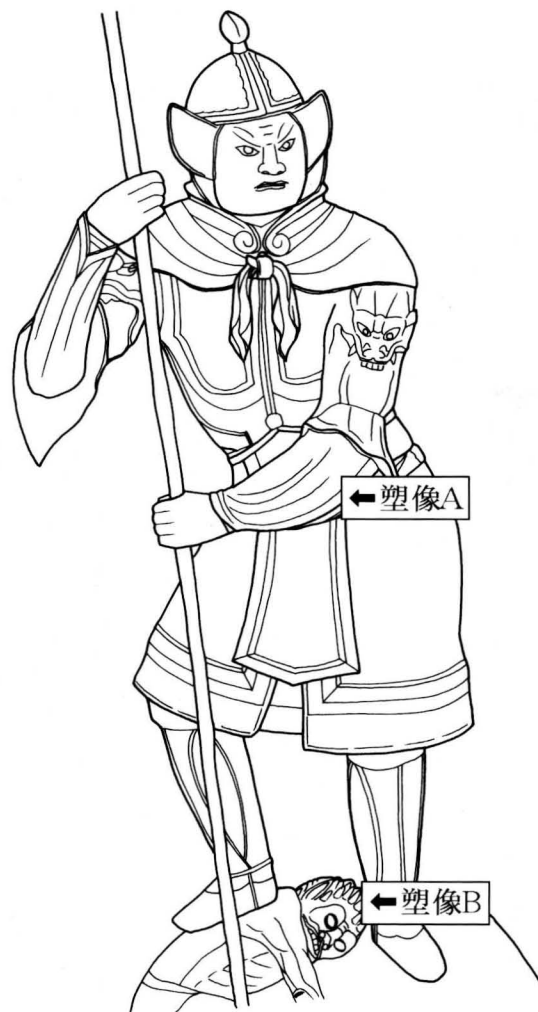
表面には、頭髪の特徴が幾つもあります。畝うねのような凹凸が5本以上並んでおり、髪の毛を束ねた状態を表しているようです。1束ごとに線で髪の毛を描き、束ねた毛先は縮毛ちぢれげになっています。ヘラや細い棒状の道具で突き刺したり、押しあてており、一般に四天王が踏んでいる邪鬼に多い技法です。これらのことから、邪鬼の頭髪の一部と思われます。

**塑像の色彩** 塑像Aの表面の一部には、赤と黒の色彩があり、黒の上に赤を塗り重ねた箇所もあります。蛍光X線分析で成分分析をした結果、赤はベンガラ（酸化第二鉄からなる赤色顔料）であることがわかりました。黒の色彩については、分析できませんでしたが、漆の可能性もあります。また、塑像Bの頭髪の表面にも、塑像Aと同様にベ

ンガラが塗られていたようで、赤い彩色がわずかに残っています。同時代の塑像の例からみて、大安寺で出土した塑像も、赤（あるいは黒も）だけでなく、数色に彩られた、色彩豊かな塑像であった可能性があります。

塑像は、他の材質の像と比べて、細部の表現が容易で製作費用が安く、材料も調達し易いといった長所がある反面、重くて壊れやすいという欠点もあります。さらに、土中に埋もれていたとなると、残り具合が悪くなることは言うまでもありません。大安寺で出土した塑像は、焼けたことによって一部が残ったものと思われます。

今まで『資財帳』の記載にとどまっていた奈良時代の塑像が、実際に発掘調査で出土したことは、大安寺の歴史を理解していく上で貴重な発見といえるでしょう。



出土した塑像の部位

『奈良六大寺大観10』岩波書店、1968

東大寺法華堂の増長天像（乾漆像）写真からトレース、改変